

課題曲の中の課題 2011

櫛田 朕之扶

課題曲の提出の仕方が、ほぼ定着したと見れば良いのでしょうか。今年も、マーチが2曲とマーチ以外の曲が3曲、全日本吹奏楽コンクールの課題曲になりました。

まず、2曲のマーチですが、昨年と同じように、違ったスタイルの2曲が提出されました。

4分の2で書かれた『マーチ「ライヴリー アヴェニュー」』は、動機の執拗な繰り返しや歯切れの良いリズム設定から言って、「行進曲」という形式を確保した、行進曲らしい行進曲です。内容は、表題のように、爽快な・洒落た・ジャズっぽいコード設定から、ジャズやポピュラー・ミュージック的なコード進行の設定になっていて、1950・60年代のミュージカルの幕開けを楽しんでいるような曲となっています。

もう一方の『南風のマーチ』は、もうこの言葉を何回も使ってきましたが、いわゆる課題曲マーチです。テンポやリズムは行進曲として設定されていますが、内容的には歩くマーチというよりはコンサート・マーチでしょう。一種のムード音楽か、ポピュラー音楽と考えれば良いと思います。内容は、「春が来た」という季節や自然に対する気持ちを描いたもので、これもいつも言っていますように日記のような「私音楽」です。

マーチ以外の曲では、性格・形式・手法の全く違った3つの作品が取り上げられています。

『天国の島』は、日本人的な感性が、脱都会的な方向から描かれた作品です。伝統的な日本音階を上手く組み立てた部分と、西欧音楽的に処理した部分とで、作曲されています。総じて日本音楽です。

『シャコンヌ S』は、「シャコンヌ」という古典的な形式に、和声の組み立て方や、テンションを加える、といった方法を用いて現代的色彩をほどこした作品です。プロの作曲家の手によるもので、必要十分条件の備わった、隙がない曲となっています。音楽の基礎をしっかり学習するための、良い教材でもあります。

『「薔薇戦争」より戦場にて』は、シェークスピアの戯曲からインスピレーションされた曲、との解説が作曲者によって書かれています。戯曲の付帯音楽でもないようですので、色々な場面・登場人物・葛藤などを、演奏する側も自由にイメージすれば良いと思います。ただ、あの「薔薇戦争」のドロドロとした人間模様や複雑なストーリーのどこを捉え、描けば良いのか、また、戦場といってもどの場面なのかをイメージするのは、大変苦勞します。これだけの長さの曲において、壮大なドラマを皆さんの表現力で…と言われても、それはちょっとゴメンナサイと言ってしまいたくなります。この曲は、「薔薇戦争」という大きな組曲があって、その中の「戦場」ということでしょうか。私なりに、は、「小規模の交響詩」と捉えることはできますが。

V 「薔薇戦争より」 戦場にて / 山口哲人

現代音楽と呼ばれるジャンルに入る作品です。昨年の『吹奏楽のためのスケルツォ第2番《夏》』とは違った書法で作曲されています。この作品の方が、感覚的な音の流れ・響きを捉えて創り上げられていますので、昨年の作品から見ると、こちらの方が同じ現代音楽というジャンルに入るとしても古い書法と言えます。旋律にしても和声にしても、捉え易いのではないのでしょうか。昨今のヨーロッパ・アメリカの作品にもこのような書法の作品が多く見られ、コンクールでもよく取り上げられています。

テーマになっている「薔薇戦争」は、英国史上・王位継承を巡っての争いです。W.シェークスピアの戯曲「ヘンリー6世」3部作や「リチャード3世」の舞台にもなって、王位継承をめぐる人間模様・葛藤のドラマが見られます。そこには、人間の持つ内面の欲望・醜さ・卑劣さが、皮肉を込めて描かれています。この戯曲の付帯音楽として作曲した、という作曲者からの解説がありますが、その全容がこの曲ではないと思います。壮大なドラマをこれだけの曲で表現する、ということは不可能だと思います。「薔薇戦争」という組曲があって、その内の一曲だと思えます。

曲は大きく、1～25小節まで・26小節以降の2つに分かれて構成されていると考えられますが、1つの大きな前奏曲的なまとまりとして見ることも出来ます。

構成されているファクター・パーツは解り易いので、部分部分の構成はよく理解出来ると思います。前半では、3連符に続く和音が舞台を設定して行くのですが、和音の配置は、3和音・4度堆積和音を交互に配列したり、同時に鳴り響かせる、といった設定で創られています。調性の音楽のように、機能するわけではありません（ダイアトニック・コードからの脱却を図ったものですが）。あくまで、響きの創造を求めたものです。8分の12(8分の6)で動く Piccolo・Flute は、空気・炎・木の葉・光など、ある種の自然な揺れを感じさせるのでしょうか。登場人物を促す旋律ラインは音階的で、それほどものすごく想定外に飛躍するわけでもありません。むしろ、内面的な深層心理にでも向かっているようにも思います。

26小節目の【D】からの半音階で動く3+2・2+3のリズムには、4度堆積和音を伴って、より内面的に深く掘り下げられていく何かを感じます。【F】の直前で、1つのクライマックスが構成されます。トールボットの討死、敵の死を嘲笑していたジャンヌ・ダルクの命運も尽きて…。【F】から、セント・オールバンズでの、国王ヘンリー6世とヨーク公との前面对決へと進んで行くのでしょうか。【J】からの Maestoso は、ヨーク軍の勝利によるヘンリー家の滅亡、リチャードの野望、【K】は、このあと何が起こるのか誰も気づいてはいない…。そのようなところで、この曲は終わっているように思います。再びヘンリー7世が王として即位し、薔薇戦争が終結するまで、リチャード3世の野心と滅亡のドラマは展開するのですが…。

2011 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲分析

課題曲の中の課題 2011

監修・著作：櫛田 肤之扶

編集・制作：株式会社ウィンズスコア

配布・公開日：2011 年 5 月 31 日

楽譜引用元：

堀田庸元・佐藤博昭・新実徳英・渡口公康・山口哲人

『2011 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』全日本吹奏楽連盟、2011 年 2 月 1 日発行

※本書の著作権保有者は、著作者である 櫛田 肤之扶 であり、櫛田 肤之扶 の協力・許諾のもと、
(株) ウィンズスコアが本書を制作・公開しております。

※本書に掲載されている楽譜の一部は、『2011 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』からの引用
であり、全日本吹奏楽コンクール課題曲の権利は、(社) 全日本吹奏楽連盟に帰属します。

※本書の配布・コピー等の利用については、本書の内容・目的を理解した上で、金銭の受け渡し
が発生しない場合に限り許可いたします。

※本書を使用するの、第三者との紛争・トラブルが発生した場合、著作者・制作者、及び (社)
全日本吹奏楽連盟は一切責任を負いません。